

# 教職課程センターだより 第21号

発行日 2019年3月27日

## 巻頭言 子どもの最善の利益を守ること

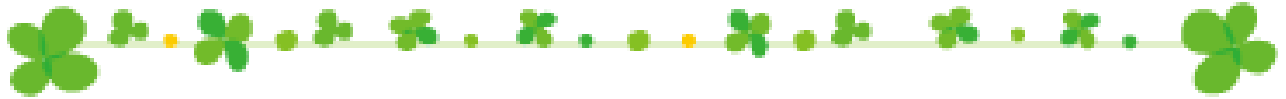
教職課程センター副センター長（東海分室） 藤井 啓之

最近、千葉県で教育をめぐる二つの事件が世間を賑わせました。一つは、野田市の児童虐待死の案件。校長が父親に凄まれ、情報開示するという「念書」を父親に渡してしまい、また、教育委員会が、心愛（ゆあ）ちゃんの父親に気圧されて、心愛ちゃんがS.O.Sを発信した学校でのアンケートを父親に渡してしまったというものです。もう一つは、松戸市の担任・教頭によるいじめっ子への攻撃と思われる録音データの流出。こちらははまだ全容がわからないので即断は避けるべきでしょうが、若い女性の担任が、子どもたちの前でいじめっ子にいじめられっ子を殴らせ、駆けつけた教頭ともども、いじめっ子の言い分は聞くのに、いじめられっ子の言い分を遮ったりして聞く耳を持たず、いじめられっ子を非難するというものです。なぜこのようなことが起こるのでしょうか。これは、現代日本の学校や教師・教育関係者の仕事において、「子どもの最善の利益」（子どもの権利条約 第3条）を守ることの優先順位が極めて低いということを物語っているのではないのでしょうか。

数年前、愛知県下の現職の小学校教師と話をしたとき、自分の教室以外の教室に児童が入らないように、休み時間は教師が廊下で子どもを見張っていなければならない、という話を伺い、「教師の仕事は看守なのか」と驚いたこともありました。「子どもの成長にとって何が必要か」ではなく、「学校の業務を滞りなく進めるために何が必要か」という観点でしか、あるいは「教師がどうやって学校や自分の立場を守るか」という視点からしか、教師という仕事を見られなくなっているのではないかと心配になりました。しかし、これは昔話ではないし、時代遅れのものとして今後消滅していくとはとても思えないのです。というのも、現在、政府が掲げているSociety 5.0を見ると、AIが個々人の学習進度を判定し、個人カリキュラムを編成し、教師はその学習を支援するというようにしか読めないからです。このような政策が進んでいけば、学校や教師は、一部の大人が決めた「産業界に必要な資質・能力を持ち、統治（指導）するのに都合のよい『道徳』を持った人間」を製造するための管理者になりさがってしまいます。ふくしの総合大学で教師を目指す本学の学生諸君には、ぜひとも子どもの最善の利益の視点を持ち、子どもに寄り添える教師になり、このような時代の流れに楔を打ってほしいものです。

ところで、さすがに大学生は子どもの権利条約でいう「子ども」には該当しませんが、はたして大学教員は「学生の最善の利益」を追求しているのでしょうか。世間から指弾されないように、学生の「資質・能力」や「道徳」を徹底することばかりに目を奪われていないのでしょうか。大学教員を20年以上勤めてきて感じるのは、時代が下るにつれて、学生の過ちに対する厳罰主義が強まっているということです。かつては学生の立場に立っていた教員の言動が変化するのも目の当たりにしてきました。子どもの最善の利益を守り、子どもに寄り添える教師を育てるためには、まずは、大学教員が自己点検することから始めなければならないのかも知れません。

## 退職のご挨拶



### 10年間の大学教員生活を振り返って

教職課程センター 高須 和博

思い起こせば10年前、教職員組合の役員として一緒に働いたMさんを介して、現理事の平野征人先生とお会いすることになった。名古屋駅近くの居酒屋において3人で酒を酌み交わしながら組合談義に花を咲かせ、楽しい一時を過ごした。この出会いが私の人生を大きく変える契機になるうとは、その時は全く考えもしなかった。

こうして2009年4月から本学の教職課程センターに籍を置き、教職をめざす学生たちの指導をすることになった。入職当初は、右も左も分からない状況で何もかもが手探りの状態であった。39年間の高校教師としての職歴・経験があるとは言え、研究実績の乏しい現場教員にとって「大学で教える」ことへの不安とプレッシャーはとて大きく、1年目は教職関係の本を買いあさり、授業準備のために猛勉強をしたことを今は懐かしく思い出す。

教職課程センターの仕事は、大和田先生や松下先生の支援・協力を受けながら、学校支援ボランティア活動やフィールドワーク、東三河の東栄町を拠点とする地域交流活動など、教職をめざす学生たちの経験や学びの裾野を広げる活動に努力を傾けた。なかでも教員採用試験対策には特に力を入れた。ともに教職をめざす仲間意識を持たせながら、「教え合い、助け合い、支え合う」関係のもとで教員採用試験に挑戦する自主ゼミの編成、教員採用試験対策講座の充実、合格者体験発表会による「教授の極意・知恵」の継承などに取り組んだ。また、専門主体の本学にあって「教職課程」を履修する学生は少数派であり、学部内において疎外感を抱きやすい立場にある。それ故、教職をめざす学生の溜まり場づくりと気軽に相談、支援・指導ができる関係づくりにも注意をはらった。こうした地道な努力の積み重ねが少しずつ実を結び、多くの卒業生を教育界に送り出すことができるようになった。

しかし、ここ数年、学内改革により教職課程認定を取り下げる学部が相次ぎ、近年の「ブラック化する教育」が喧伝されるなか、「えっ！こんなに少ないの！」と声をあげるほど、教職課程を履修する学生も減ってしまった。教職が学生たちにとって憧れの職業ではなくなってきた現状に寂しさを感じる。

私の半世紀に及ぶ教員生活のなかでも、この10年間の大学教員生活は最も楽しく充実した時期であった。学識豊かな先生方との出会い、教え子たちとの語らい・交流は教員人生に花を添えるものであった。高校退職後の第二の人生において、有意義な経験を重ね、実り豊かな時間を過ごすことができたことに感謝も尽きない。これも偏に先生方や事務の方々、学生たちのお陰である。心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

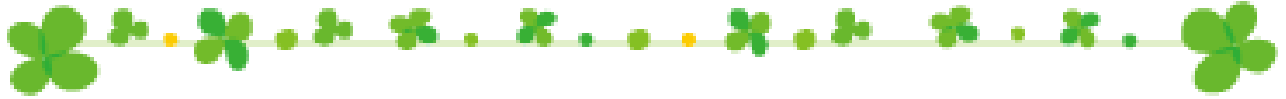
退職後は、「延長10回」のリリーフ役として引き続き講師勤めをしながら、これまで女房に任せてきた畑仕事に精を出し、時に趣味の釣りや旅行を楽しみたいと考えている。

また、長年続けてきた「九条の会」などの市民運動にこれからも携わりながら、これまで培ってきた経験を地域や社会に少しでも還元できるように尽力したいと思っている。

最後に、本学の益々のご発展と皆様方のご多幸、ご活躍を祈念してお別れの言葉とします。

長い間、大変お世話になりました。





## 教職課程を履修する皆さんへの期待をこめて

子ども発達学部 心理臨床学科 林 克次

10年間、日本福祉大学において教職課程を専攻する学生の皆さんと過ごすことができました。また、この生活を支えてくださった学部・学科の先生方、事務室のみなさま、たくさんの方々にお世話になって契約の年度末を迎えようとしています。ありがとうございました。

この間、自宅から美浜キャンパスへの出勤の折に見掛ける道路脇の景観から、日本の現代文明の変化に危惧を感じることがありました。そのひとつは、道路脇の側溝や法面辺りに散乱するごみ。特に、ペットボトルやコンビニの袋に入っているごみ。信号交差点では路面に広がる灰皿から捨てられたと思われるタバコの吸い殻。などなど、枚挙にいとまがないくらいに、人が身の回りの環境を無意識に破壊していることが増えているのではないかと思われることです。

南知多町のある漁港に立ち寄った際、海面や海中にペットボトルや発泡スチロールの箱が散乱しているのを見掛けました。プラスチックごみが、魚類や鳥類などの生命に影響を与えるマイクロプラスチックとなる。他人ごとではなく身近な問題として目の前に広がっている現状に驚愕を隠せませんでした。

文明の進展が、先人が築いてきた人としての文化を破壊してはいないだろうか。便利なペットボトルやプラスチック包装が、自然環境を壊し、自然に命を委ねる生き物の命を奪ってしまうことになってはいないだろうか。ごみが、取り敢えず自分の目の前から無くなればそれで良い、というような人の心に寂しさを覚えます。

近年、新聞の社会面やテレビのニュース、ワイドショーなどで報道される記事からは目を背けたいくなる事例が多々見られます。暴力や人の命を奪ってしまう事案、高齢者福祉施設での殺傷、子を虐待死にまで追い込んでしまう事例。また、人の財産を騙し取るなどなどなど。

一時の感情や欲求の衝動を抑制する心が弱く、短絡的に非人道的な行為に走ってしまう。あまりにも自己中心的で、当たり前の人としての道を歩く生き方ができなくなっている人が起こす事案が多く見受けられるような気がします。今、目の前にあることにしか意識が届かない。陰にあることやその先にあること、奥までの見通しがきかない。あまりにも人としての育ちが未熟な人の事例ではないでしょうか。

人が人としての集団や社会を構成し、互いにそれぞれの人権を尊重し合いながら生きていく。そのような「ふ・く・し」の原点が見失われつつあるのではないかととも思われます。日本福祉大学において教職課程を専攻される学生の皆さんと一緒に考えたかったことは、人格の形成に寄与する教育の目的を啓発し、誰もが住み易い集団や社会を構成する一助となるような将来の進路を描いていただき、支援し続ける意識を強くもっていただきたいということでした。

教育という言葉が、学校教育にのみ特化されている言葉のようにとらえられ、人が人として育っていく過程での、広範なライフステージにわたる子どもたちや人々の人格形成に関わる言葉であることが見失われているのではないかとこの思いでした。

まさに家庭・地域・学校が一体となって、人の人としての気づきや学びの機会を提供し育んでいく。人の人格形成に関わるこれらのすべてが教育機会であり、教育そのものではないでしょうか。

教職課程での気づきや学びを、社会の形成者の一人として、人としての生き方や在り方に関わる課題を解決しようとする力として発揮し続けていただきたいものだと強く期待します。





## 学生たちが育っていく姿に出会えたことの幸せ

山口 正（子ども発達学部、教職課程センター運営委員）

私が日本福祉大学にはじめて赴任したのは2010年度からです。3年間、非常勤講師として総合演習を担当しました。当時は1年、2年の通年演習でしたので、ゼミ生たちとはじっくりかかわることが可能でした。ゼミ生の発案・運営で、ゼミ時間外にも多様な学びと交流の場を体験できたことは、私にとって幸運でした。2013年度から専任教員として6年間、教職科目や他の演習も担当、教職の就職支援にもかかわるようになりました。

以下、教師をめざす学生との出会いの一端を退職にあたっての言葉として記します。

私が教員採用行政を調査研究していることから、センター運営委員として大学主催の教員採用講座の立案や運営にかかわったり、学生の採用学習会（自主ゼミ）での助言を依頼されたりする機会が多くありました。そのなかで、教師をめざす学生たちとの出会いに恵まれました。三人の事例を紹介します。

公立大学入試を不合格になったKさんは、日本福祉大学に通うようになったことが恥ずかしくて、1年生のときは友達に自分が日本福祉大学に通っていることを言えなかった学生でした。この過去を自主ゼミのなかで告白しました。そんなKさんが願書検討会では、障がいをもつ家族のことをさらけ出しながら特別支援学校教員への志望理由を語っていました。願書テクニックをはるかに超えた教師論・教育論が交流されていました。「私が就職活動、教員採用試験に向けての活動のなかで一番大切だな、と思ったことが仲間の存在です。やっぱりこの4年生になって初めて仲間の大切さに気づくことができたのは本当に大きなことだな、と感じています」、Kさんが後輩（1年生）に贈った言葉です。

「大学入試に失敗し、大学生活はそのリベンジであった」と自主ゼミで語ったTさんは、1年生のときから教員採用試験の準備を始めていました。他のゼミ生たちが願書案の写しを交流したとき、「自分の願書記入内容を見せたら、他の受験生がそれを使うかもしれないので損じゃないですか」とゼミ生に問いかけたことがありました。そんな疑問・不安にこたえたのがゼミ生たちでした。卒業後、県外小学校に就職したTさんは昨年8月の2次試験直前講座に先輩助言者として参加、自分を変えた教訓を語っていました。

「教員採用試験の不合格通知を見たとき正直とても悔しくてつらい気持ちに駆られた」Nさんは、自分自身に教職への思いを再度問いかけ、仲間のなかで気持ちを交流できたことで克服ができたと私に教えてくれました。そして、「このことで、気づけた気持ちなどがたくさんありました。このような経験しておくことは、自分にとって決して無駄なことではなく、むしろ大切なことではないかなと思うようになりました。人の気持ちがより分かったり、子どもたちの悩みや苦しみに、共感的に寄り添えたりできるようになるのではないかなと思います」「この経験は、やっぱり、今も尚消えなかった先生になりたいという思いにいかされていくと思います」と試験を振り返ったコメントで記していました。

学生たちが教職への気持ちを問い返し、交流・共有しながら育っていく、そんな生の姿に出会えたことは幸せなことでした。その出会いに感謝！

学生たちの成長を可能にした土台に本学の学部専門教育があることは確かです。また、センター運営委員になって驚かされたのは事務職員（とりわけ教職課程事務室）の献身的で精緻な仕事でした。そうした理解の機会にも恵まれた数年間でした。

新年度からは非常勤として、教職科目（教職入門）に今後もかかわっていきます。





# 子ども発達学部10周年記念シンポジウム

## — 教育と発達と福祉と —

教職課程センター長 山本敏郎

2018年4月日本福祉大学に初めて教員養成を主たる目的とする学科をもつ子ども発達学部が設立10周年を迎え、11月3日に開設10周年記念シンポジウムを開催しました。現職教員、退職された教員、卒業生、そして大学祭中にもかかわらず学生たちも含めて100名を超える参加者がありました。

シンポジウムのテーマは「子ども・発達支援のこれまでとこれから」。塩崎保育専修長、橋本学校教育専修長、堀前心理臨床学科長が、それぞれの立場から「これまでとこれから」を発題し、意見交換を行いました。3名の発題者が共通して強調していたのは、「これまで」も「これから」も福祉の視点で、保育・教育・心理を研究し、その専門性を備えた学生を送り出していくことです。たとえば、

○保育： 「できる—できない」という子どもの見方ではなくて、一人ひとりの感じ方の違いを感じることでできる専門家を育てる。

○学校教育： 生きづらさを抱えた子どもにまっすぐ向き合うことでできる専門家を育てる。

○心理： 支援を必要とする人の立場から世界を見ることでできる専門家を育てる。

司会をしながら、福祉的な視点からみた保育・教育・心理とは何かを考えていました。福祉とは何かをここで語るには紙面が少なすぎますが、ただひとつ言いたいことは、ここは大学なので、語呂合わせの「ふくし」で満足するのではなくて、一定の学術研究の成果にもとづいて語りたいということ。政治学、経済学、社会学でもいろいろな議論があることを承知のうえで、福祉（well-being／人の状態の良さ、善き生）とは、その人のもっている潜在的な要求の実現可能性（capability）が高まる／高めることとっておきます。3人のシンポジストが語ったのは、潜在的な要求の実現可能性を高める指導者や援助者の専門性でした。学部名が子ども発達学部なので、その専門性について発達とは何かと関連づけながら以下述べてみます。

成達は英語でdevelopment。動詞形のdevelopを他動詞として使うと（能力を）開発するという意味になり、自動詞で使うと（能力を）発揮するとなります。教育学では教育と成達を不可分の関係にあるととらえます。他動詞のdevelopと結びついているのが、教育を教育する側の都合で能力開発することととらえる考え方です。人材養成のことですね。教育学はこういう教育観や成達観と闘ってきた歴史をもっています。教育はドイツ語ではErziehung。内側にあるものを引き出すという意味です。自動詞のdevelopと結びついていて、相手のなかにある潜在的な要求の実現可能性を意識的に高めていく働きかけと意味になります。

そのためには、子どもをたんに「能力の束」と見ないことが必要です。何が「できる—できないか」とか、これを学習させたら「何ができるようになる」というのではなく、まず、子どもが生活現実とどう格闘しているか、子どもが抱えている生きづらさをつかむ。次に、子どもの成達要求、承認要求、存在要求をまるごととらえる。そしてそのためには何が必要かを洞察でき、その要求を実現するための見通しを、子どもとともにともにつくっていく。こうして潜在的な要求の実現可能性を高めることができる。

そうだとすると、小中高大どこでも流行っている「なにができるようになるか」を明確にした授業設計や、学習目標（到達点）を決めて努力するという目標管理型学習は、相手のなかに学びたいという要求を形成し、その実現の見通しを与え、あるいはそれらを対話しながら紡ぎだしていくという、潜在的な要求の実現可能性を高めるための教育なのか、再考したほうがよいのではないのでしょうか。





### 3年スタートアップ講座を受講して

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 森 柚香

教員採用試験に向けて行われた「スタートアップ講座」に引き続き、「ステップアップ講座」にも参加させていただきました。今回は学修アドバイザーの宮園先生が「教職教養の学習方法」について分かりやすく教えてくださいました。ワークシート形式の資料、教員採用試験の過去問を基に、「教職教養」にはどんな科目があるのかが理解できた後、それらを「不易(変化がない科目)なのか、「流行(変化がある)科目」なのかに分類したことで、その区分に応じた学習方法(学習の優先順位、NG学習方法等)が分かりました。宮園先生が実践していた楽しい学習方法もその都度、教えていただくことができ、非常に参考になりました。

この講座を受けるまでは、正直「『教職教養』ってどうやって勉強していけば良いんだろう？」と不安に思っていました。ですが、実際に受講してみて「明日から実践できる教職教養の学習方法」について知ることができたので、学習へのモチベーションが上がり、私にとって大きな自信になりました。受講後、私はさっそく学習のアドバイスを活用したり、資料を見返したりして、少しずつ学習を進めています。今後もこのような講座を積極的に活用していきます。

### 教員採用試験合格体験報告会に参加して

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修3年 高木 歩水



教員採用試験合格体験報告会に参加をし、先輩方のお話を聞き、「私も来年この場所で体験秘話を語りたい！」と思いました。1ヶ月の教育実習が終わり、CDP講座が始まりました。そろそろ、教員採用試験の勉強を本格的に始めなければいけないと思っても、何から初めて、どこをどうしたら良いのか、今後どのように試験に向けて進めていけば良いのか全く分からず不安が募るばかりでした。とりあえず、参考書を買ひ、まばらに勉強をしていました。しかし今回先輩方のお話を聞き、どのように勉強をしたら良いのかが分かりました。

まず、一番大切だと感じたことは、自分の受ける県、市の情報を得ることです。それぞれ、受ける県によって試験内容も形式も異なります。併願で試験を受けた先輩も何人かみられ、自分の生まれ育った土地ではないから、十分に情報収集が必要だと言っていました。そして勉強方法は当てずっぽうに勉強をするのではなく、自分に必要などころ不必要などころを整理し、勉強していくことが大切だと分かりました。どこを受けるにしろ、そこで自分が何をしたいのか、どんな教師になりたいのかが重要なのだと教えていただきました。

次に、2次試験について聞いたことがよかったです。私は、2次試験の練習をどのように行っていたのか、どんな試験だったのか気になっていたためとても参考になりました。面接練習に多くの時間を費やしたとおっしゃっていた先輩もいました。自主ゼミを自分たちで作り、そこで練習をしていたと聞き、私もぜひ自主ゼミを作って参加したいと思いました。2次試験のお話を聞いていて、一人ではできないことに気づきました。一緒がんばる仲間の存在が支えになるのだと思いました。だから、私も友達や試験を臨むゼミの子と多くのことを話して、自分なりの考えを自分の言葉で伝えられる練習をしていきたいです。

最後に、今回先輩方のお話を聞き、感じたことは「自信」です。どの方からも自信が感じられました。それは、それだけ教員採用試験の勉強をやりきったと言えることだと思えます。自分の得意不得意と向き合い蓄積された自信が力になったのだと思いました。また、個性あふれる先輩方をみて、多様な人材を教育委員会も求めているのだと思ひ少し安心もしました。まずは、どんな教師になりたいのかを明確にするとところからもう一度始めたいと思います。私も自信に満ちあふれるほど教員採用試験勉強をやりきりたいです！



## 名古屋市教員採用試験 合格体験記

子ども発達学部 子ども発達学科 初等教育専修 2014 年度卒業  
西井 智隆

私は、名古屋市の教員採用試験を受け続け、5回目で合格することができました。今回の受験は、講師歴3年が経過したことで一次試験の「総合教養」が免除となり、「小論文」と「小学校全科」と「口述試験」で、二次試験は「集団面接」と「個人面接」でした。ここでは、私自身が心がけていたことや、「これが良くて受かったんじゃないか？」と思う所を4つピックアップして書きます。

### 「文章構成に時間を割く」

一次試験の小論文。ここ数年、「〇〇というキーワードから連想されることを、自身の教育観に結び付けて論ぜよ」というお題で、試験時間は1時間。小論文を書くときに意識していることは、いきなり書き始めないことです。書いて消しての繰り返しは時間が無くなってしまうので、20~30分かけて裏面に構成をメモ書きします。ある程度構成ができてきたら、表面に書き始めています。構成は「はじめ・なか・おわり」の三部構成になるように心掛けていました。

「はじめ」… 〇〇から連想される自身の教育観を提起

「なか」… その教育観を感じられる具体例・体験談

「おわり」… その教育観を教師として、子どもたちにどう生かしていきたいか

このように構成し、一貫して自分の観点がずれないように書きました。

### 「作戦会議をする」

一次試験の口述試験。受験番号順に8人ずつが一つのグループとなり、一緒に試験を受けます。例年、受験者で討論をする時間が設けられます。私は過去の試験で口述試験の判定が良くありませんでした。その経験から、「最初から論点を絞って話し合うこと。意見を尊重し合うこと。」が求められるのではないかと考えました。そこで今回はグループのメンバーと一緒に昼食を食べながら、誰が初めに発言してお題を確認するか、次に誰が討論の論点を提案するかなど、討論の進め方をみんなで決めました。その結果、討論の論点がすぐに決まり、スムーズな滑り出しをすることができました。多少仲良くなったためか、相手を否定するような意見もなく、みんなで付け足し合ったり、脱線したら論点を確認する発言をしたりして、終始、和気あいあいとした雰囲気でした。

### 「自信を持って話せる経験をする」

二次試験の個人面接。面接官は2人で、1人は、志望理由や講師歴、今までやってきたボランティア活動、長所・短所など、主に願書に書いたことについて、もう1人は教育課題や定義など専門的な事を質問されました。今回の試験で面接官2人ともが興味をもってくれたと感じたのは、大学時代に行った活動についてでした。どのような思いでその活動をしてきたのか、その活動で何が得られたか、何が学べたか、教育現場で行かせることはあるか、など聞かれました。この活動は自分のアピールポイントでもあったので、願書にも、少し大きめの字で書いて目立つようにしました。特別なことでなくてもいいと思います。ただ、自分がどんな思いでやってきたのか、そこで何を学んだかを自信を持って話すことが大切だと感じました。

### 「子どもたちを思い浮かべる」

二次試験の集団面接。集団面接は、場面指導があります。受験者4人に対し、面接官2人。教育現場で起こりそうな場면을テーマに4人で話し合い、その後、一人ひとりが場面指導を実施しました。場面指導を考える時、「うちのクラスだったらこうするなあ、Aくんにはこう言ったら、こんな反応するだろうな」などと、自分の学校の子に置き換えて考えました。その場면을イメージしやすくなり、指導の仕方を具体的に考えられることができました。なにより、子どもたちの顔が浮かび、少し緊張がほぐれました。

以上、私の合格体験記でした。

# 卒業生からの近況報告



## 子どもたちに向き合う日々の楽しさ

子ども発達学部 心理臨床学科 障害児心理専修 2017 年度卒業  
神奈川県 知的障害教育部門特別支援学校教諭 鈴木 日菜

教師としての初出勤。どんな子どもたちに出会えるだろうかとドキドキわくわく、楽しい気持ちの反面、不安でいっぱいだった春から、あっという間に1年が経とうとしています。私はいま、神奈川県の特別支援学校でパワフルな子どもたちに囲まれ、笑顔いっぱいで働いています。

### 【子どもたちがかわいい！それが仕事のやりがい】

私は学生時代、放課後等デイサービスでアルバイトをしていました。利用する子どもたちは中高生で、その経験から基礎免許は中高社会の取得を目指し、教育実習やインターンシップでも高等部に入らせていただきました。しかし、配属された学校で言い渡された学年はなんと小学部1年生。聞いたときはガーン！と頭の中で鐘が鳴り、4月から先生やっていけるだろうかとても不安になったことを、今でもはっきりと覚えています。でもそれは杞憂でした。担任するクラスの子どもたちをはじめ、学校に通う子どもたちはみんなとても可愛くて、子どもたちのことを考えている時はどんなに疲れていても「よし、がんばろう！」と思えます。教材や授業内容で悩んだときは一緒に組んでいる先生たちに相談したり、保護者とのやりとりでは学部長や ST など専門性の高い先生にも入っていただいたり、チームで丸となって子どもたちの生活や発達を支えていこうとしています。子どもに対する深い愛情と様々な専門性を兼ね備えた先生方に支えられて、真摯に子どもたちや保護者に向き合えたこの1年は、これからも仕事をする上での支えになっていくと思います。

この1年で「教師で良かった」と感じた出来事を1つ紹介します。4月当初、私の担任するクラスにはどうしても生活のルーティーンが変化したことで落ち着けず、教室にいられない子どもがいました。私はその子の国語や算数に当たる授業を受け持っていたのですが、最初は1分座っていただけるかどうか怪しい状態で、私もどうしてよいやらわからなくなりとても悩んでいました。チームの先生や支援連携の先生方の支えもあり、少しずつ新しい生活のルーティーンが出来てきた頃、その子は教師が場の雰囲気盛り上げようと歓声を上げたことに笑ったり、通りすぎるたくさんの先生に手を伸ばしたりするようになりました。先生方もどんなに忙しくても「〇〇さん、今日も元気だねえ〜！」と声をかけてくださり、それが嬉しかったのかさらにいろんな先生に近づいていくようになりました。そうやって大人とのやり取りの中で「自分は認められている」という認識を高めていったのか、もっと別の理由があるのか、大人のエゴでどうしても「新しい環境で承認されたという気持ちを高めていったのかも！」と思いたいのですが、授業に座って参加して次の活動に期待したり、教師と手遊びや踊りを踊って笑ったりする姿を見て、その心の成長に喜びを感じました。教師による働きかけで変わったことなんてほんの少しだけで、その子自身が持っていた力があったからこそだと思いますが、それでも、その成長をみんなで見守っていけることに、いまとてもやりがいを感じています。

### 【おわりに】

教師の仕事は事務仕事から力仕事まで様々で、大変だと感じることももちろんあります。どうしても疲れてしまった時は週末に鎌倉まで遊びに行って、リフレッシュして子どもに向き合っています。教師を目指す皆さんも、教採の勉強頑張って疲れたときはしっかりと遊んで、いつか会える子どもたちの笑顔を夢見て、がんばってください。







## 「社会とのギャップをうめるために」

子ども発達学部 心理臨床学科 2013年度卒業 渡邊 恵

### 1. 現在、赴任している学校

私は在学中に大阪府の教員採用試験を受検し「高校公民」で合格をいただきました。現在は高等学校ではなく、高等支援学校に赴任しています。本校は【障がいをもった子どもたちが就労を通じた社会的自立をめざす】ということを目標に設立されました。現在は大阪府下で本校を含めた5校が同じ目標のもと、支援教育を行っています。

### 2. 生徒のようす

学校見学に来られたお客様や、職場実習でお世話になっている企業様からは「え？どこに障がいがあるの？」と言われることもたくさんありますが、カッとなった時の感情のコントロールが極端ににがてな生徒、時間や物の管理がにがてな生徒、読み書きがにがてな生徒、相手の状況を見て行動することがにがてな生徒など、様々です。

### 3. 職業学科を設置し、職業教育を実施

本校の特徴は3つの職業学科を設置し、週11コマを職業科の実習にあてています。どの学科も「就労するうえで必要な力」を身につけるべく実習を行っています。

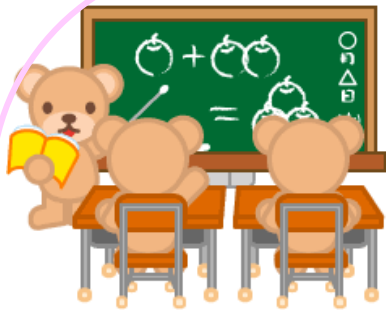
私は4年前から厨房・事務系の学科の教員として特に事務系の授業のを担当をしています。職掌学科の教員は常に厳しいスタンスで授業を進行しなければなりません。「挨拶・返事！」「話を聞く姿勢！」「日誌は両手で相手に見える方向に出す！」「しんどくても態度に出さない！」「ていねいな言葉で常にやりとりを！」「製品はていねいに仕上げる！」「にがてなこともこつこつ取り組む！」など、生徒たちが就労した時に困らないように、日々同じことを繰り返し伝えていきます。

### 4. 就労を実現するための進路指導

私は昨年までの4年間、進路支援部として生徒の進路指導にあたりました。特に昨年は3学年の進路主担として、キャリア学習・職場実習の指導や対応にあたりました。本校の就労率は85%～95%を高い数字を維持していますが、社会は甘くありません。進路指導部として企業様とやりとりをさせていただいたなかで（社会はまだまだ厳しい。障がいのある子が就労するうえで支援をしてもらって当然と思っはいけないな…）と感じることも沢山ありました。（支援をしてもらって当然！）と学校や保護者・生徒自身が思えば思うほど、彼らが社会に出たときに《学校と社会とのギャップ》に呑み込まれて、仕事が続かなくなってしまう状況も発生しています。会社も彼らを支援する努力を今後も続けてほしいですが、子どもたちも会社に合わせようとする努力をやめないことが社会をたくましく生き抜くうえで大切なのもかもしれないと実感した4年間でした。

今年度は生活支援部として生徒の指導に当たっています。毎日生徒とぶつかりあう日々のため、気力も体力も必要な仕事ですが、彼らがイキイキと激動の社会を生き抜くことができるよう、本気で向き合っていきます！そしていつか自分が一般校に赴任した時に、この支援教育が生かせればと思っています。





## インターンシップに行ってもよかった

子ども発達学部 子ども発達学科 学校教育専修2年 高橋 沙萌

私は大学に入学した当初から教職インターンシップ I に参加したいと考えており、とても楽しみにしていました。2年生の5月に入り、いよいよ上野間小学校でのインターンシップが始まりました。私は1年生のクラスを12月まで毎週担当することになりました。いきなり私がクラスに入って、子どもたちは受け入れてくれるのだろうか、初日の緊張感や不安は今までにないものでした。しかし、そんな心配はまったく必要なく、すぐに子どもたちから駆け寄ってきかれて、たくさんお話をすることができました。

翌週からは授業に参加して、算数の時間では計算スキルの問題を解くときに苦戦している子どもがいればアドバイスをしたり、「さえ先生見てー！合ってる？」と回答のチェックを求めてくる子どもがいたらチェックをしたりもしました。できなかったこと、分からなかったことを成し遂げることができたときの子どもたちの喜ぶ笑顔からは、一步成長することができたたくましさを感じることができました。

昼休みには子どもたちと元気に外で遊んだり、教室でお絵かきやコマ回しをして遊んだりしてコミュニケーションを深め、帰りの会では「先生からのお話」を担当することになり、毎週子どもたちと様々な話題で盛りあがりしました。下校指導も週替わりでそれぞれの班について行くなどして、限られた時間のなかでたくさん関わることができました。

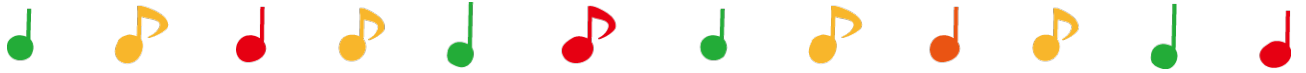
子どもたちが下校した後は、宿題のマル付けや、掲示物の作成、プール清掃、除草作業、グラウンドのながりまきなど、多種多様な仕事を体験することができました。

2学期に入ると学習発表会という行事があり、1年生は国語の「くじらぐも」という題材を歌や鍵盤ハーモニカの演奏を交えて発表する練習をしていました。残念ながら私は発表会当日に大学の授業があり、本番を見ることができませんでしたが、インターンシップ最終日のお別れ会でその発表をみせてくれました。一生懸命に覚えたセリフを話す姿や、元気に大きな声で歌う姿に感動して涙が止まりませんでした。5月に初めて出会った時から12月まで長かったようであつという間に感じ、もうこのクラスの皆ともお別れなのだと思うとたくさんの感情がこみあげてきました。

私は半年間の感謝の気持ちと、子どもたちがこれからもキラキラ輝き続けてほしいという気持ちを込めて折り紙でメダルを人数分折り、プレゼントしました。メダルをもらおうと跳んで喜んでくれる子どももいて嬉しかったです。

この半年間で子どもたちとの関わり方はもちろん、一人ひとりに適した支援の多様性、授業の進め方や集団として過ごしていくうえでのクラスの雰囲気作りなど、たくさんのことを体験し学びました。

来年度の後期にはいよいよ教育実習がやってきます。いきなり現場に足を踏み入れるのではなく、今回の教職インターンシップ I での経験が必ず生きてくると思います。教育実習に向けて、これから残りの時間を大切に過ごしていくとともに、インターンシップを通じて教師になりたいという思いが、これまで以上に強くなったので、この気持ちを忘れずに過ごしていきたいと思っています。



## 一日学校実習体験記

社会福祉学部 社会福祉学科 4年 久米 健哉

11月28日に阿久比東部小学校にて1日学校実習を行わせていただいた。小学生を対象とした学校現場というものは初めてであった。そのためどのように小学生と触れ合うべきかわからない状態で臨んだ。阿久比東部小学校の印象は生徒が活発で元気であった。さらに生徒数が多いため教師の負担という点も多いのではないかと考えながら実習を行わせていただいた。

はじめに私たちは特別支援のクラスへ入らせていただいた。自閉症、情緒障害、病弱、知的障害のクラスに分かれていた。特別支援のクラスが一つの教室に集まり学習発表会の練習を行っていた。そこで私は病弱の生徒のサポートをすることになった。どのように接するべきかわからない状態の私を、その生徒が手を握り「よろしくね」と言ってきた。このおかげで私の緊張も解け、生徒との会話ができる。私はクラスになじむことができ、多くの子と会話をすることができた。学習発表会の練習で生徒は活発にダンスを踊っていた。その際に疲れやすいことを先生から伝えていただいたため、定期的に生徒に心配りをするようにした。無理をさせないように配慮することができたと思う。その後の行動もこの生徒と過ごすことが多かった。放課中は教室で過ごすことが多かった。病弱のため外で激しい遊びをすることを控えていると分かった。教師は放課中も生徒を見ているため、トイレ等の時間も取れていないのではないかと感じた。教室の中には絵本や遊具が充実しており、生徒が飽きることなく過ごす配慮をしていると分かった。次に5年生のクラスへ行き英語の授業を見学させていただいた。この授業では電子黒板を用いたものであった。電子黒板を用いることによって視覚教材の幅が広がることが分かった。電子黒板がさらに普及されることですべてのクラスで刺激的な授業を行えるのではないかと考えた。その後は2,3年生の授業を見させていただいた。発言する際には大きな声で皆に伝わるように。発言を聞く際には生徒の発言を聞き、その発言に賛成か反対かを述べていた。普段から自分で考えるよう促していたために行える授業であると分かった。

今回初めて小学校という学校現場を見させていただき、小学生と過ごすことの楽しさと教師の負担を知ることができた。教育実習では高校生と過ごしたため、小学生の活発な印象が新鮮であった。そして教師の苦勞が目に見えるように分かった。特別支援のクラスでは生徒から目が離せない状況が続いていたこと。通常クラスでは毎時間授業を行うため、宿題等を見る時間が少ないことが挙げられる。さらにクラスをまとめ、授業を行うことの大変さも知ることができた。



## 今後の予定

### 【新2年生】

教職課程オリエンテーション

美浜キャンパス 3月27日(水) 4限~5限 1231教室

東海キャンパス 3月27日(水) 4限~5限 S304教室

教職課程登録

3月27日(水)~30日(土) 12:00まで

※教職課程オリエンテーションに出席後、課程履修費の納入及び課程登録を行ってください。



### 【新3年生】

教育実習手続き(中学校・高等学校・特別支援学校 教育実習内諾依頼)及び介護等体験 説明

美浜キャンパス 4月11日(木) 3限

東海キャンパス 4月11日(木) 4限

※4年次の教育実習校の内諾依頼に向けた手続きについて説明します。

### 【新4年生】

教育実習手続き(中学校・高等学校・特別支援学校 教育実習直前)及び介護等体験 説明

美浜キャンパス 4月11日(木) 4限

東海キャンパス 4月11日(木) 5限

※教育実習I事前事後指導のクラス・日程については各学部の時間割冊子を参照してください。